

平成 29 年 2 月 8 日

# 南の風 221

南部ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

因みに宮澤は、岡津小から岡津中を経て、金沢総合高校に進学する。金沢総合ではエースとしてインターハイで優勝する。さらに2012オールジャパンでは、高校のチームとしてベスト8まで進む快挙を成し遂げた。ベスト4決めでは、デンソーに86対62で敗れるが、この年のオールジャパンの台風の目として、バスケットボールファンを大いに沸かせた。

話を1Qの攻防にもどします。JXはややオフェンスの流れが悪くなる。(ゾーンに対してボールをペイントに入れることができない状態)しかし、渡嘉敷、間宮がオフェンスリバウンドを確実に取り、ゴール下で得点を重ねる。富士通は得点された後の切り替えを素早くして、ボールを側線につなぎ町田のドライブイン、長岡のミドルショットで対抗する。両チーム拮抗した展開となる。

第1Q終了、19対16JXがリード。

第2QはJXが吉田、岡本に代わり、1番藤岡、32番宮崎が出場する。藤岡は筑波大学から入った1年目の選手(リオ五輪の候補選手であった)であるが、身体能力、バスケットボール1Qが共にたいへん高い。今年は吉田のバックアップであるが、いずれはJXのトップガードに成りうる逸材である。

JXは開始早々、渡嘉敷のゴール下ショットがバスカンになりフリースローも決めリードを広げる。その後も、間宮、宮澤のミドルが決まり、突き放しに掛かる。富士通は山本の3P、長岡のミドルで対抗するが、それ以後、得点が伸びずに5分間ノーゴールとなる。打開を図るために、ディフェンスを再びゾーンに変える。しかしJXはオフェンスリバウンドを制し得点を重ねる。残り時間4分弱で、ようやく町田のフリースローが決まる。結局富士通は、2Qにシュートの精度が落ち9点しか取ることができなかった。JXは、間宮が17点、宮澤が13点、渡嘉敷が11点と主力の3人が2ケタ得点となり、43対25となり前半が終了する。

3Qに入る。両チームマンツーマンでスタート。入りのオフェンスは、富士通は町田のドライブから長岡へキックアウトパスするが、残念ながら長岡のミドルが外れる。JXは宮澤が間宮の左ミドルポストのスクリーンを利用し、大きく右へカッティングしてディフェンスを置き去りにして、左45°の吉田からのパスを受けジャンプショットを決める。富士通はトップの町田がボールを保持した瞬間、右エルボーの篠原、長岡のダブルスクリーンを篠崎が囷のカッターとしてボールサイドを切れた後に、山本がカットする素振りを見せ、リバーターンしてポストに跳び込みターンショットで得点する。お互い合わせのプレイが功を奏する。その後JXは吉田、渡嘉敷のホットライン(吉田からローポストの渡嘉敷への裏へのロブパス)で得点する。このプレイはJXの十八番であるが、富士通の吉田へのプレッシャーが弱いように感じた。渡嘉敷を守ることも大事であるが、パスの出所を抑えることも重要である。吉田にタイトに付くと抜かれることもあるが、ドライブさせた方がミスは起きやすい。両方守ることは不可能である。ならば、相手の確率の高いプレイを徹底的に抑えることが必要であろう。(藤原の私見)

富士通は山本が篠原のスクリーンを利用してドライブショットを決める。バスカンもとなりテリースローも決まる。50対28となる。ここで富士通は、1-1-2-1のゾーンプレスを仕掛ける。